

字部長声明を出したことを深く我々の責任とし、自己批判し、白紙撤回します。

団交の継続。明日十時半から再開を確約して打ちきる

一月三十一日(金) 文学部第三回臨時学生大会が開催され、四六名の学友が出席し、五点到れた文部委員案の議案が反対なしの多数で可決された。以下①二月一日理部会団交実現の一月二日声明白撤回②大学自治③教授会自治論及び大学教員への政治支配を打倒するものとして、学部学生、院生による教員の任免権、リキウム選或権を獲得する。又、論議として提出された「大学主管理」の内容を固める目的で今後討論を流行すること。試験はピットで阻止すること。賛同者全員は文学部選挙委員会に学生証を出すことが二九六名の賛成で支持された。

二月一日(土) 法学部学生集会で、大東団交実行委員会委員長と結成。集金に出席した畑中助教授は「試験は行なう君ら(法闘委)は話し合えない一言々と発言、学友の怒りをかう。」同日、今田学生議長は「団交合との公開交渉に参加した諸君へ」個人声明を発表しキャンパスを去る。

声明 二月一日

乾田三、植村三、宮地国敏、真田哲郎、西村幸雄、岡崎長一郎
今回の団交合の八項目要求をめぐり学友と団交合との交渉過程、私達は学友と団交合の統一の場であり学友問題は表面上、経済的、専生政策上の問題や管理、運営に関する自治の具体的問題として提起されているが、その基礎に常に大学教員の問題がありこれを見逃し、表面上の要求に目を奪われ、その対応策しか持ち得ないといふれば、問題の本質を見誤るものであることを知り、また主張してきた。しかるに一月十六日未明、学友と団交合の交渉を継続中、中川会館の封鎖が行われるという事態を契機として以後、大学の対策は表面的事態の対応策に走り、本質を見誤る危険にさらされてきた。

その過程で現在の事態を解決する方向に就いての学内の意見の違から、混乱が相次いでいる。私はこれらの意見の相違をのり超えて、新しい大学を目ざしてともに事態の解決に努力して頂けることを切望し、今まで話し合いによる解決に努力しながら努力してきた。それと一致しているものと確信している。

大学はこうした行錯誤と混乱をもちながらも、この間の全教職、学生の積極的行動に支えられ、なお多くの欠陥を持ちながらも一月二十七日の「立命館大学の全学生教職に訴える」という「訴え」の時点で立ちえた。

この「訴え」は、寮生との交渉を踏まえ、今後、教職員、学生のこの問題に対する態度を結集する中で改められなければならない問題を提起しているが、この「訴え」の中で、ことに主張したい点は学生諸君の提起するさまざまな問題を、その表面上の表現や主張あるいは立に感ぜられるのではなく、学上の問題としてとらえそれを日中の大学教員の本質である教師を含むクラス及び現場の中で、教職員一人一人が、その成員としての意識をもつて今や対立ともいえる厳しい相互批判と論議の中で確かめあい、立命館の教員を基礎から掘り起こし、立命館の歴史である五者会談、学振協、全学協を内部から生き生きとしたものとしていきたい。(中略)

しかし私の希望は今日のところ、とうてい満たされそうにないし、このことを踏めるのに努力してきた私達は責任を感ぜざるをえない。

私達は此処を去るが、本日までの討論を支えてきた私たち自身への批判をもつ諸君も含めて全立命人に感謝の意を表する。
大学は以上のような基本的内容をもつ自己批判を明らかにし、残る八項目について一月十五日の時点で立つて交渉を続けるものと信ずる。今や寮生が大学の欠点も含む姿を自らの中に抱え直し、自らが目指している教育創造のために、その存在と理想をかけて決断し、直ちに中川会館の封鎖の解除を寮生自らの行動を以て行つてくれることを私たちとして強く要請する。

立命の最後の良心は、去り、好戦的武闘クーデター派は、そのみにくい姿をおおうものを失なう。正面衝突はいつめられる。

二月に入つて以後、試験を進行するか阻止するかは極めて重要な焦点であった。キャンパスに登場した非日常性の空間は圧縮され、日常のスケジュールの進行の中で、闘争の熱気はさまざるといふ危機にのぞんで、何度も延期においこみながらあくまで強行しようとする後期試験に対して、法、文闘委はその阻止闘争を展開した。三十一日乾教部議長は、キャンパス集会で試験の延期を受け入れる。

二月三日(月) 三五〇名の学生の結集の下に、経営学部学生大会が開かれ、経営学部自治会提案の議案が可決された。以下①学部教授会団交、理事会団交の実現を通じて「立命館方式」②全学協、学振協を解体、再編せよの学生自治の不断の革新。③学生権力の創出を通じて決定参加権、拒否権、自主管理権を獲得せよ④学友会リコール。
全共闘運動の前衛的位置を占めることになる全日本史論委員会と民青系のピラを並列しておく。(いずれも一月二五日づけ)

【資料】

② 全ての争点を構築論

学生が大学に対する革命的姿勢を強化すればなるほど大学当局は自らの理念と権力においていつそう内容なき暴君となる。

立命理念の幻想への確執、歴然たる暴力の行使、すなわち、「新闘社占拠」、「学協襲撃」、「中川会館武闘襲撃」事件において暴露された大学当局の現在の姿が、それなのだ。立命体制においては教員内容から人事、財政決定権まで彼ら民青の支配装置として成立させられている。

現在、この立命には所謂教育はない。我々の運動はだから、学生自身が全く今までは異質の意識をもつて突進を結ぶ「教育の内容」を今、大学に成立させて行く必要がある。

我々が創造しつつある「運動体大学」の運動的状況、教員的情況は学生の議論の蓄積という実態によつて、形式主義者達の「手続民王主義」を一切無価値なものとする。さらに我々は民王主義概念の範囲内で表現されつくせないものを創造しようとしている。それは遠い遠い成長の道程を幾千万の苦悩を自ら背負つて、全く違つた異質の概念の創造に向つて歩んで行くことなのだ。

我々がここで創造すべき大学を「運動体大学」と題して断言したのは、それが民王主義・大学自治、学生自治等死せる言葉によつてイメージできぬ大学像を対象化せんが為である。その大学は社会存在としては反体制運動の一翼を荷ない、自己の存在原点に関わつた変革性志向の教育を行なう大学である。

現在、旧日本史専攻には、我々学生が存在しているのみであり、大学教育内容を決定し、充実に、具体的な物質的基礎に転化する全展開の主体者と我々はなり得る。

先に我々が提出した「研究室自主管理宣言」は我々の運動が唯一の存在基礎を拡大再生産し得る。すなわち自モカリキウム。自主